花のフルツ

川端康成選集第五卷

花のワルツ

新潮社

昭和31年8月19日　印刷
昭和31年8月23日　發行

川端康成選集

第五卷

（第八回配本）

花のワルツ　定價　二六〇圓
地方價　二七〇圓

著者　川端康成

發行者・東京都新宿區矢來町七一　佐藤亮一　印刷者・東京都千代田區神田神保町三ノ二三　塚田重　印刷所・塚田印刷株式會社　製本・加藤製本所

＊落丁・亂丁本はおとりかえいたします。

發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局七一一一―八番
振替　東京八〇八番

目次

花のワルツ……七
日雀……一一
朝雲……一三五
田舍芝居……一五一
再會……一六九
反橋……一九八
しぐれ……二〇九
住吉……二三一

小　切……二三三
掌篇小說……二四一
骨拾ひ……二四三
帽子事件……二四八
男と女と荷車……二五四
髮……二六三
月……二六四
夏の靴……二六七
冬近し……二七一
有難う……二七七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

母……二八二
合掌……二八八
駿河の令嬢……二九四
盲目と少女……二九八
時雨の驛……三〇四
雨傘……三一三
妹の着物……三一六
水……三二三
わかめ……三二五
ざくろ……三二五

花のワルツ

花のワルツ

「花のワルツ」を踊り終つた。
その瞬間、けれども下りて來る幕がまだ彼女等の胸を隠しきらないのに、友田星枝はいきなり姿勢を崩した。
早川鈴子は片脚の爪先で立ち、片脚をいつぱいに開いて揚げながら、體の重みを星枝の手と觸れ合つた手の方へやつてゐた時なので、つまり、鈴子と星枝と二つの體で一つの舞踊的な體を描いてゐた、その半身が不意に切つて落されたやうに、ぱたりと倒れかかつて、星枝の腹に抱きついた。
そのはずみで、星枝も一足よろめいた。鈴子は星枝の腹に顔を押しつけてぶら下るといふ、をかしな恰好から立ち直らうとして、しかしまだ、片腕で星枝の肩につかまりながら、
「馬鹿つ。」
と、星枝の頬を一つ平手打ちした。
さうして、毆つたことをびつくりするやうに、星枝の顔を見つめてゐたが、
「星枝さんとはもう一生踊らない。」
言ひながらまた力が拔けて、鈴子は星枝の肩にもたれて來た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ふいと星枝は肩を廻した。鈴子を振り拂ふ風にではなかつた。また、毆られて怒つた風にではなかつた。けれども、支へをはづされた鈴子は、前のめりに兩手を突きかかつた。星枝はそれが自分のせゐとも知らぬもののやうに、振り向きもしないで、ぼんやり立つてゐたが、強い響きで言つた。

「私も一生踊らないわ。」

この時幕が下りきつた。

幕の裾が舞臺の床に落ちる音と同時に、鳴り止まぬ觀客の拍手が、風のやうに遠ざかつて、ふつと靜かであつた。

舞臺の照明も少し暗くなつた。

しかしそれは無論、觀客席の喝采に答へて、幕が再びあがる時、舞臺に花やかな明るさを添へる準備であつた。踊子達もそれを豫期して、今の踊の續きのやうな身振りで走つて行つた。舞臺の袖には、花束を抱へた少女達が待ち構へてゐた。

拍手の波がまた高まつて來た。

「あんなひどいわがままつてないわ。」

と、鈴子はしかし星枝の肩を亂暴に抱いて、皆の後から歩き出した。

動くことを忘れてゐたやうな星枝は、人形じみた素直さで、鈴子のままになつた。

「御免なさいね。私ここを叩いたかしら。」

と、鈴子は笑ひながら、星枝の頰に手をやつたけれども、星枝は顔をそむけて、ひとりごとのやうに呟いた。
「もう一生踊らないわ。」
「お客に見えたら、どうなつたと思ふの。笑はれるわ。新聞にも書かれるわ。今夜の成功も水の泡になるわ。ほんたうに見えなかつたわね。幕の陰だつたわね。脚だけは見えたかしら。私がよろけたと思つたかしら。でも、きつと分らなかつたのね。あんなに拍手、アンコオルだわ。きつとアンコオルがあるわよ。」
と、鈴子は星枝の肩を揺すぶつて、
「二人でよく先生に、お詫びしませうね。先生が見ていらつしやらなくてよかつたわ。」
二人が舞臺の袖へ近づいてくると、そこに押し合つて、はしやいでゐた踊子や少女達は、ちよつと默つた。鈴子は少しはにかみ顔ながら、微笑んでみせたけれども、星枝はむつと口を結んでゐた。それにはなにか人を默らせるものがあつた。
しかし、もうその時は幕があがつてゐた。
踊子達は目顔で誘ひながら、手を取り合つて舞臺へ出た。鈴子と星枝とを先きに立てた。二人を眞中にして、舞臺へ一列に並ぶと、觀客の拍手に答へた。
そこへ少女達がそれぞれ花束を持つて出て、鈴子と星枝に手渡した。
この花の使ひ達は、十一二から下の女の子ばかりであつた。まだ六つ七つの幼い子供もま

じつてゐた。みんな振袖を着飾つてゐた。その母や姉達や、また「花のワルツ」に出てゐない踊子達は、ほかの踊の衣裳のまま、少女達の髪を撫でてやつたり、帶を直してやつたり、舞臺の袖でさつきから世話を燒いて、舞臺でまごつかないやうにと、花束を渡す相手を教へておいたのだ。

花束は星枝と鈴子との手に集まつた。

「花のワルツ」は二人のための踊であつたからだ。振附もさうであつた。ほかの踊子達は、二人の踊の背景となるために、また二人の踊の裝飾となるために、舞臺へ出てゐたのであつた。二人がいつも目立つやうに、衣裳もほかの踊子達とちがつてゐた。

この小さい花使ひ達のために、觀客の拍手はまた高まつた。

鈴子も星枝も花に胸が埋もれるほど、花束を抱かせられた。

まだよちよち歩きのやうに見える、一番幼い子だけが、渡しおくれてゐた。それは空色の細かい花一色を結び集めて、大輪の向日葵よりも小さいかと思はれる花束であつた。女の子は星枝の前に立つたのだけれども、星枝はその人も花も小さ過ぎて目につかぬとでもいふ風なので、

「星枝さん、あなたよ、可愛い花。」

と、傍から鈴子が注意すると、いぶかしげに星枝の顏を見てゐた小さい子は、その聲で、花束を鈴子の方へ差し出してしまつた。

「ううん、ちがふの、星枝さんよ。」
と、鈴子は呟いたが、目顔の合圖も幼い子には通じないし、かうなつては星枝が横から奪ふことも出來ないし、鈴子は愛想よく空色の花束を受け取つて、子供の頭を撫でながら小聲で、
「ありがたう。もういいの。ママがあすこで呼んでるわ。」
振袖の少女達が花の使ひを果して退くと、舞臺の踊子達はもう一度觀客におじぎをして、幕が下りた。
「これ星枝さんの花束よ。」
と、鈴子は今の小さい花束を、星枝が抱いた花束と彼女の胸との間に突き挿して、
「どうして受け取らなかつたの。あんな小さい子にまで、舞臺で恥をかかせるなんて、あんまりだわ。泣きさうだつたわよ。」
「さう?」
「自分一人が人間ぢやないわよ。よく覺えとくといいわ。」
と言ひながらも、しかし鈴子は微笑んでゐた。
小さい空色の花束は、薔薇やカアネエシヨンの花束に挾まれて、反つてこれこそほんたうの花のやうに、色鮮かであつた。
踊子達は口々に、可愛いとか、しやれてゐるとか、綺麗だとか、おとぎばなしの冠のやう

たとか、夢の國の菓子のやうだとか、珍らしがつて、星枝の胸を覗き込んだが、
「匂ひは？」
と、一人は手に取つて見た。
「これを持つて踊りたいわ。なんて花かしら、星枝さん、なんて花なの。」
「知らないわ。」
「見たことない花だわ。こんな印象的な花束をくれる人つて、どんな人。」
と、返すのを星枝は無造作に受け取つて、
「この花、萎れてるわね。」
相手は驚いて、星枝の顔を見た。星枝はもう一度、
「萎れてるわ。」
「萎れてやしないでせう。ここでそんなこと言はなくつたつて、歸つて花瓶に挿したら、よくなるのよ。くれた人に聞えると、惡いわよ。」
「だけど、萎れてるわ。」
少し離れて見てゐた鈴子が、
「萎れて厭なら、私に頂戴。まちがつて私が受け取つたんで、氣を惡くしてるの？」
星枝は默つて、ぽいと花束を投げた。それは鈴子の手に渡つたけれども、途中で舞臺の床に落ちたものがあつた。寶石のついた首飾であつた。花のなかに隱してあつたとみえる。そ

れを結びつけてあつた、一莖二莖の花が、首飾と共に拔け落ちてゐた。
しかし、星枝は花束を投げるのといつしよに、踊子の間をさつと通り拔けて、今の小さい女の子の前にしやがんだと思ふと、
「ねえ、御免なさい。私が惡かつたのよ、御免なさい。」
と言ふなり、胸の花束ごとその子を抱き上げて、樂屋への階段を駈け上つて行つてしまつた。首飾の落ちたのも知らぬ素早さだつた。
「星枝さん！」
と、鈴子は鋭く一目見送つて、首飾を拾つてから、空色の花束についてゐる、小さい名札を見た。それを踊子も一人二人覗きこんで、
「勝見——勝見つて人、鈴子さん知つてる？」
「知つてるわ。」
「男の人？」
鈴子は答へなかつた。
星枝は駈け上りながら、胸の花束が階段の途中に落ちても頓着しなかつた。片足のトオ靴の紐が解けた。それを蹴飛ばした。靴は遠く下の廊下へ落ちた。彼女は振り返りもしなかつた。
この間にも、アンコオルを促す觀客の拍手は鳴り止まない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong